

有りがたくかんしゃ致しております。先は、右まで申上げました。

故久米治の妻小藤です。

松下様、御忘れになられたかもわかりません。

今日もまたよしなにくれし

一日を思うわが身の幸福を

よろこぶ九十と六つの坂を

ぶじ越してやがて峠

も近くなるらん 小藤

松井夕ケヨ

御たつみ誌、第44号を只今三月二十七日午後三時半、拝受致し、厚く御礼申し上げます。

今日は晴天で、東京支部春の例会で『川越の、いも懐石を賞味して、町を見て歩こう』の日で、御出席の皆様、御楽しみの御事とお慶び申し上げます。私は昨秋の例会と、今年新年会も楽しみにしておりましたのに、お寒かったので、身を案じて欠席致しました。いつもの会にも出席して皆々様に、お目もじすると、亡夫元の生前を思い御なつかしく存じているのに、残念でございました。私は身体丈夫で、衣食住『ベツシヨタイ』故、家と屋敷は広くて

も、孫夫婦、曾孫達とは別居して

居りますが、長男65才、秀子60才

とは三人同居で、休日には曾孫達

必ず遊びにまいり、にぎやかに楽

しい老後を感謝し乍ら時々は、留

守番役も引受け、『若い人とおな

じで嬉しい耳と声』の通り大丈夫

頑張っています。

歩くのが早くないので、自動車

があぶないので、外出はあまり致

しません。今年になって、代々木

の寺へ墓参りと、銀行、健康検査、

一寸した買物等々、七度しか外出

して居りません。

曾孫も七名になりました。若い

時、松井家で辛抱した事が大変幸

福につながりました。

松村 勲

先月の大会の節は、いろいろお世話になりました。有難く厚く御礼申し上げます。

御寺泉涌寺は、勿論初めての処で、そのいわれをきき、その堂塔の偉容を拝見して深く深く感銘を受けました。又食事は京都独特の精進料理を頂き、心深く賞味させて頂きました。

次に、有志スピーチの中で、神

戸製鋼所の外島健吉さんの門司時

代（現在、北九州市門司区）神戸

製鋼所門司工場（名称不詳、全市

小森江）に居られて、近くにあつ

た帝国麦酒（現在のサッポロビー

ル九州工場）のサクラビールを愛

飲され、その因縁で今も、サッポ

ロビールを愛飲されているという

ことをきいて、本当になつかしく

感じました。

外島さんがおられたのは大正の

一けた時代ではなかったでしょう

か？実は私も大正五年から九年ま

で帝国麦酒に勤務しておりました。

最初はボンサンとして入社、九年

より十四年まで就学、十四年より

正社員となりました。

例の米騒動の時のことを、今で

もはつきり思い出します。何分、

企地区には、帝国麦酒、神戸製鋼

の外、鈴木系の会社が多く、（治

金、アルコール会社、製粉など）

群集からねらわれていたので、警

備のため、小倉から兵隊がきてお

りました。

隅田社長も猟銃を持ち込んで、

会社に籠っておりました。大正七

年七月のこと。私は鈴木本社から

派遣されて来て居られた、竹村房

吉さんと一緒に、門司港まで米屋

わが人生

坂本 寿

もし、あの時、ああいう判断を自ら下さなかったとしたら？もしあの時代に、あの人物に出会っていなかったら？……………

近ごろ独りになると、『もし』という仮定の言葉で、自分の歩いて来た足跡を振り返ってみる事が多くなった。ちょうど、子供がおもちゃをもて遊ぶような調子で、ふと、そう考えるのである。

今さら、なにを、と思われるかもしれない。どう考えてみたところで、人生の歩いてきた背景に、道を二本も三本もつけるといふのは不可能なことなのだから。しかし、それでもなお、ぼくは、これまでとは違う人生を想像してみたい。

いくら考えたって、違った人生なんて想像がつかはすがない。が、この八十四年間を顧みると、どうしても運命の不思議さを感じて、そう思わずにはいられないのである。

明治三十四年十一月、ぼくは土佐（高知県）の高岡郡中土佐町久礼で生れた。三方を山で囲まれた

小さな漁港の町、久礼は、台風で知られた室戸岬と、足摺岬との、ほぼ中間に位置している。太平洋の潮騒をききながら育ったわけである。

学歴といえば、無いに等しい。高知商業しか出ていない。そのぼくが、よくもまあ、人並な実業人になれたことだと思ふ。

今やわが社、日本発条株式会社は世界の三大メーカーの一つに数えられるようになった。

ぼくには、『日登』の中心柱を、『土佐つぽコンビ』と言われた藤岡清俊名誉会長と二人で築き上げた、という自負がある。昭和十四年創業時に資本金拾五万円、従業員五十人足らずの町工場だったこの会社が、四十数年の間に、資本金百拾億円、社員三千五百人の大企業に発展したことを思うと、実に感慨深い。

思えば、大正十一年、高知商業学校は卒業時に、ぼくを一流銀行へ推薦してくれた。一流銀行に無試験で入れる。銀行は、当時の商業学校の学生にとっては、またと

ない素晴らしい就職先であり、名誉なことでもあった。

『先生、わがままを言うても、えいろうか。わし、銀行には行きたくない』

『え？何を言うんだ、坂本』

『わしが行きたい、と思うちょるのは、神戸の鈴木商店です』

『お前、バカだな。鈴木商店へ入るためには、試験があるぞ。あそこは、学校の推薦状が通用しないことを、知っちゃうるか』

『知っちゃいます』

『もし、その採用試験に落ちたら、どうするつもりだ。お前は、せっかく優等で卒業したのに、就職が一番最後にまわって、ざつとした（一番よくない）会社へ入ることになるんだぞ』

『わかつちよります。学校で推薦してくれた銀行は、そりゃあ一流だし、無試験で入れてもらえるのだから、こんなえい（よい）こととはありやあしません。けんど、あの銀行には学閥がありますらう。わしのような、商業学校しか出てない者は、いくら出世したところで、タカが知れちゅう』

『そうは言うてもな、坂本。銀行マンになったら、髪も七三に分

襲撃を見物に出かけ（会社は小倉と門司の中間の大里にあった）帰りの電車も襲われて動かなくなり、歩いて二里余（八km余）帰りました。

今、文芸春秋刊、城山三郎著『鼠』を読み返して見て、鈴木を買占め問題が、故なきものなることを再認し、悪夢を想い起こしております。

新聞の曲筆、銀行のいじめ（帝国麦酒も受けました）も今更ながら、くやしくてなりません。感慨の余り、ペンが大分、興奮気味となりました。何卒ご容赦下さい。皆様の益の御健勝をお祈り致します。

追記II帝国麦酒は桜麦酒と改称（鈴木解散後）昭和十八年十一月、大日本麦酒と合併、二四年九月、日本麦酒と朝日麦酒に分割、私は日本麦酒（現、サッポロビール）に残り、去る四〇年四月まで九州支店に勤務しておりました。

けて、背広も着れる。月給は三十七円という高い金額やし、お前、父さんに仕送りもできるじゃないか

『いや、先生。鈴木商店の月給は、最初九円やと聞いています。が、学閥がのうて、実力次第、成績さえよければ、外国へもやってもらえるそうです。わし、自分の力で仕事をしてみたい。外国へ行つて、『営業』という仕事をしてみたいですよ』

『ふーむ。しかし……。では尋ねるが、お前、鈴木商店のことをどこで知ったのか』

『こんまい（小さい）時から、雑誌を取りよりましたきに、いづごろと聞かれても、はつきり分かんけど、わしの頭の中には、鈴木の名前がこびりついちゃうのです。『実業家』になりたいと思うたのも、鈴木のことを知ってからですきに』

『ジツギョウウカ？坂本、お前はそんな言葉を、よう知っちゃう』

鈴木商店の大統師である金子直吉という人は、土佐の吾川郡名野川村で生れた大先輩である。金子家はもと高知城下の分限者。

と称せられる富豪だったが、維新の経済激動期のおおりで直吉翁が五、六才の時に、高知の棟割長屋に移り住むところまで、おちぶれた。

そのため、学校へも上がらず、十一才の時、紙くず拾いを始め、十二才で乗出の長尾砂糖店へ、十三才で乾物屋へでつち奉公、それから質屋へ奉公し、番頭になっている。

『今(大正十一年)、鈴木商店は、世界的に注目されている大正財閥の花形となっています。わしも、金子翁のように、自分で偉くなってみたい。思う存分、仕事をしてみたい。先生、どうですらう。月給が九円でも、かまわんですきに、鈴木商店を受けさせてくれませんか』

『お前が、それほど言うなら……』
担任教師との問答の末、各学校のトップクラスの卒業生ばかりが集まる、鈴木商店の試験を受けることになった。
当時の拙家の経済は相当苦しく、父が小さな事業に失敗して、ぼくは貧乏な学生生活をしてきた。

南国土佐とはいっても、冬はやはり寒かった。冬服すら買えず、白い夏服を黒く染めてごまかし、その下はシャツ一枚で通していたころである。

そんな不自由な暮らしを続けていたせいか、『出世さえすれば、スキ焼きを腹いっぱい食べて、サイダーを存分に飲める』と、ひそかに考えた。ぼくにとつて、その夢がかなえられるのは鈴木商店しかなかったのである。

幸い大正十一年、ぼくは鈴木商店へ入社出来た。多くの人生はここからスタートしたといつてもよい。

昭和二年の運命の日より、関西で修業し、昭和十四年横浜で旗揚げした時には、『関西もんはずる賢くて、信用出来ない』と中傷を浴び、事業の上でも困難をきたしたことがあった。だが、鈴木商店出身者だということ、ぼくは世間から思わぬ評価をされたのも、事実である。

もし、あの時、そのまま一流銀行へ入っていたら？恐らく、ぼくの人生は変わっていたと思う。そして、もし、スケールの大きな経営手腕を発揮した鈴木商店の

大総師、金子直吉先生の薫陶を仰ぐことがなかったら？ぼくは決して現在のような実業人にはなり得なかつたはずだ。今でも金子直吉先生の名前を口にすると、ぼくは、正座をせずにはいられない。それほど畏敬(いけい)の念が強い。人生とは、運命の連鎖したものである。

投稿への誘い

辰巳会の発展と共に発行されてきた「たつみ」は、会員にとつて唯一の情報紙であり、これにより行事の一切、会員の消息、不幸にも世を去られた物故者の氏名等を知ることができるので、今後とも絶対に定期的な発行を望むものであります。

この度「たつみ」が柳田義一さんの御体調低下によつて発行が代理編集者に移ったことを知り、今更ながら長年に互つて優雅とも云えるこの「たつみ」発行に絶大な御努力を賜りました御功績に対し、心から厚く御礼を申し上げたいと存じます。そして今後の順調な発行を側面援助の意味で、出来るだけ多くの原稿を編集者の手元に

である。
企業の生命が永遠のものだとしても、そこに魂を吹き込んできたぼく自身の人生なんて、はかないものだ。だが、それでもぼくは自ら半生をふり返る時、人の出会い、運命の不思議さに感激しているのである。

に集めるよう会員が努力したいと考えます。原稿の整わない編集が如何に絶望的であるかは、素人も充分推測できるからであります。

原稿応募につきましては、募集記事にもありますとおり、短歌、俳句、詩、写真等その道に心得のある方はその道で、又鈴木在時の思い出(これなら今でも頭に残る事柄があると思う)これとは別に家族内での喜び事、或は明治人の現世に対する小言など、懸賞論文に出す訳でないから気楽な気持ちで投稿し、編集者の手助けをしながら活気のある「たつみ」の続くことを楽しみに、奮って皆さんの投稿をお願いしたいと思います。岡本 志良 (60・4・7記)



日塩株式会社

東京都千代田区丸の内2丁目6-2
電話 東京 03 (281) 3101 (代)

- 支店 東京 横浜 名古屋 神戸
- 倉庫 東京 横浜 名古屋 神戸 四日市
- 出張所 札幌 仙台 四日市
- 営業所 横浜本牧埠頭

製品
薄荷脳・薄荷油
商品
樟脳・特殊洗剤ケイポール
ステンレス用酸洗剤サスクリーン
中和防錆剤・ステンレス不動態化处理

鈴木薄荷株式会社

代表取締役 楠瀬 正明

神戸市灘区下河原通1丁目3-1
TEL 078-881-0077(代)

希土類製品・ジルコニウム製品
スズ・ビスマス等の化学薬品
その他・セラミック原料薬品



新日本金属化学株式会社

社長 柴田 健

本社工場 京都市右京区梅津中倉町11の1
TEL (075) 861-1191 (代)
静岡工場 静岡県引佐郡細江町広岡150の2
TEL (05352) 2-0217・0207
東京出張所 新東京ビル826号室
TEL (03) 216-2558

自動車用各種ホース・高圧及び超高圧ホース・ライニング・エキスパンションジョイント・塗料・ナイロンコーティング



日輪ゴム工業株式会社

取締役相談役 鈴木 治雄
取締役会長 横田 周作
取締役社長 水上 泰年

本社 神戸市中央区江戸町98 江戸町ビル3階
TEL 078-392-1471

工場 姫路 厚木
支店 東京

豊かな経験——すぐれた技術



帝人製機

大阪本社 大阪市西区江戸堀1-9-1 ☎06(448)6001
東京本社 東京都中央区銀座6-14-4 ☎03(543)4611

営業 化繊合織機械 航空機部品
品目 油圧機器 工作機械 産業省力機械